

同志社大学蔵『中古歌仙』の紹介

福田 智子

同志社大学ラーネッド図書館蔵『中古歌仙』（以下、「同志社本」と称する。）は、『思文閣古書資料目録』二百三十三号（平成二十五年〈二〇一三〉七月）に「23 中古歌仙 二卷」（七七頁）として掲載されていたものである。上下二卷（請求番号：721.2[K9180]12 資料番号1592007623）。「證文」二枚と京都帝室博物館の「大正」の年号のある便箋一枚（請求番号：721.2[K9180]15 資料番号159200764）が付属する。この便箋は、おそらく大正時代に、当時の京都帝室博物館に本作品が展示されたことを物語るものであろう。これらの画像は、同志社大学デジタルコレクションで公開している。

さて内容は、歌仙絵に左方・右方の別と和歌一首を書き添えた全三十六図である。先の目録の段階では、本書に収められる歌仙三十六人の「人選・順序が一致する」のは、「唯一『若宮八幡宮三十六歌仙絵』（福岡県若宮市）」（同目録七四頁）と解説されているが、じつは、『日本歌学大系』別巻六に「三三

新中古歌撰〔別〕として収められている寛文元年（一六六一）の歌仙絵入り版本「中古歌仙」（以下、「寛文版本」と略す。）と人選や順序、選択されている和歌に至るまで同じである。

この『中古歌仙』については、つとに、樋口芳麻呂氏「『中古三十六人歌合』考」（『愛知大學国文学』第十七号（一九七七年））（以下、「樋口論文」と略す。）によって、成立時期や人選の基準等が考察されている。そこでは、三十六首すべての和歌が『新古今集』から採られている「すこぶる異色」な作品であることに加え、「約半数は、あまり他の歌書に選入されない歌であることが推察される」と指摘されている。

奇しくも先般、同志社大学文化情報学部文献室に新たに所蔵された「新三十六歌仙絵短冊」（請求番号：911.147[S10300、資料番号226500074。以下、所蔵している学部名にちなみ「文情絵短冊」と略す。）が、この「寛文版本」と同内容であることがわかり、『社会科学』第五十三巻第三号において紹介した

ところである。

ここで、「同志社本」の書誌を確認しておこう。卷子本二卷である。紙高三〇・九センチ、長さは、上巻五メートル八八センチ、下巻五メートル八四センチ。金銀泥を用いた彩色画を収める絹本であり、その大きさも相俟ってたいへん豪華な作りである。「證文」と表書きされた包紙の中には、二枚の折紙が入っている。古筆見として知られる神田道伴による寛保四年（一七四四）の極めである。

〔折紙1〕

中古歌仙 全二卷

畫 狩野洞雲筆

上 左 後鳥羽院

鶯の

柳原従一位資廉卿

下 左 後久我前太政大臣

あけほのや

〔花山院内大臣定誠公〕

右御両真跡無疑心者也

應需證之畢

神田道伴

〔印〕〔花押〕

寛保四年

孟春中旬

〔折紙2〕年代考（外題）

画狩野洞雲益信畢

名歌也

柳原従一位資廉卿

柳原祖大納言資明 文和二薨 凡三百七十三年

至當光綱十六代 資兼従一位前大納言

正徳二薨六十八歳

藤氏

花山院内大臣定誠公

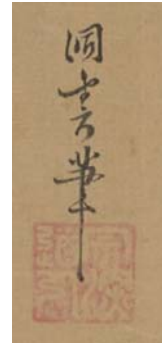
元祖左大臣家忠公 保延二薨 凡五百九十年

至當経雅卿廿四代 貞享元内大臣

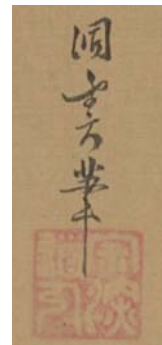
元禄五入道 法名自寛 宝永元十廿一薨六十五

これに拠ると、まず画は狩野洞雲（一二二五—一六九四）の手になるとされる。これは、上巻・下巻それぞれの末尾にある落款によっても知られるところである。

〔上巻〕



〔下巻〕



洞雲は、駿河台狩野家を立てた表絵師の筆頭格である。また、筆跡は、上巻を柳原資廉（一六四四—一七二二）、下巻を花山院定誠（一六四〇—一七〇四）の筆とする。いずれにせよ江戸前期、十七世紀の作品と見てよいだろう。とすると、前述の「寛文版本」とは、成立時期を同じくすることになってくる。

そこで本稿では、「同志社本」をあらためて「寛文版本」と比較検討し、また、「文情絵短冊」をも参看しながら、和歌本文と歌仙絵をその系譜の中に位置づけてみたい。なお、「寛文版本」は、国文学研究資料館「国書データベース」に画像が公開されている書陵部蔵「謡仙部類」（書誌ID100233391）デジタル請求記号 DIG-KSRM-305301-C' <https://kokushonijl.ac.jp/bib-10/100233391/32?ln=ja>）所収『中古謡仙 二』に拠る。

凡例

- 一、冒頭に、「同志社本」の歌番号を示す。
- 一、次に、「同志社本」を翻字する。仮名は通行の字体を用いるが、漢字は字形を生かす。また、できる限り本書の原態を尊重する。
 - 1、仮名遣い・反復記号・送り仮名は、底本のままとする。
 - 2、濁点は付さない。
- 一、「字母」では、翻字の和歌本文に即した仮名の字母を示す。漢字や踊り字など、仮名以外の表記には（ ）を、また、散らし書きの改行箇所には／を付す。
- 一、「本文異同」では、「同志社本」の本文を「寛文版本」「文情絵短冊」の本文と比較する。表記の相違は示さず、語の異なりのみを示す。本項目に限り、「同志社本」は「卷子」、「寛文版本」は「版本」、「文情絵短冊」は「短冊」の略号を用いる。
- 一、「歌仙絵比較」では、（1）歌仙絵の姿勢、（2）装束・小物に分け、「同志社本」を「寛文版本」「文情絵短冊」と比較する。
- （1）歌仙絵の身体と顔の向きを、大まかに「左」「右」「正

面「背面」に分け、「同志社本」―「寛文版本」―「文
情絵短冊」の順に示す。なお、() を付して説明を補
うこともある。

(2) 装束や小物類については、まず①「同志社本」②「寛
文版本」③「文情絵短冊」の順に着眼点を指摘し、適
宜〈備考〉を付す。

一、「出典」には、『新古今集』の部立・歌番号・作者名・詞書
を、『新編国歌大観』に拠って示す。なお、一連の歌群中の
一首で、和歌に直接記載されていない作者名・詞書を示す場
合には() を付す。また、「同志社本」の和歌本文との異
同も適宜示す。※を付して説明を追加した部分は、新日本古
典文学大系11『新古今和歌集』脚注に拠る。

一、最後に、本文と歌仙絵について、「同志社本」全体を通し
た考察を行う。

上巻

【一番】左 後鳥羽院 鶯のなけともいまたふるゆきにすきの
葉しろきあふさかの山



〔字母〕(鶯) 乃奈介止裳／以満多布流／遊支仁／須支乃／(葉)
之／呂幾／安不左可／乃(山)

〔本文異同〕○あふさかの山(卷子・短冊)―あふさかの関
(版本)

〔歌仙絵比較〕(1) 左―左―左 (2) ①垂纓冠。鼠青地に金
の丸文の袍。紅の下襲。紅の長袴。茵に座す。②立烏帽子。茵

に座す。③垂纓冠。紺青の地に金色の鳳凰文の袍。紅の下襲。紅の長袴。(備考)「同志社本」の表袴の形は「文情絵短冊」と酷似。茵は「寛文版本」と共通する。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、一八番。作者名「太上天皇」。詞書「和歌所にて、関路鶯といふことを」。※「和歌所」は建仁元年(一一〇二)七月仙洞御所(当時二条殿)に設置された。

【二番】右 前中納言定家 梅の花にほひをうつす袖のうへに軒もる月の影そあらそふ



〔字母〕(梅) 乃／(花)／尔保比／遠／宇川須／(袖) 乃／宇部耳／(軒) 毛留／(月) 乃／(影) 曾／安良所不

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 右(正面に笏)―右―右(左立膝) (2) ①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。霰紋の表袴。下襲の裾。笏。②表袴の柄は見えないが、姿は「同志社本」に同じ。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。左手に笏を持つか。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、四四番。作者名「藤原定家朝臣」。詞書「百首歌たてまつりし時」 ※正治二年(一一二〇) 〇 院初度百首の歌。

【三番】左 宮内卿 うすくこき野への緑のわか草にあとまて
みゆる雪のむらきえ



〔字母〕 宇須具古起／(野) 部乃(緑)／乃／王可(草)／尔／安
止満天／三遊留／(雪) 乃武良／支盈

〔本文異同〕 ○宮内卿(卷子)―後鳥羽院宮内卿(版本・短冊)
〔歌仙絵比較〕(1) 左(右袖を口元にあてる／やや姿勢が不自
然)―左―左(2) ①裳。引腰。花文の表衣。紅の長袴。檜
扇。②裳を描くが引腰は目立たない。③裳。引腰。紅の表袴。
〔備考〕「同志社本」のみ姿勢が異なる。
〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、七六番。作者名「宮内卿」。

詞書「千五百番歌合に、春歌」。

【四番】右 参議雅経 岩根ふみかさなる山を分すて、はなも
幾重のあとのしら雲



〔字母〕(岩根) 布三／可左那留／(山) 越／(分)／須天(、)／
盤那／毛／(幾重) 農／安止乃之良(雲)

〔本文異同〕 ○参議雅経(卷子・版本)―雅経(短冊) ○分す
て、(卷子・版本)―こえすて、(短冊) ○はなも幾重の
(卷子・版本)―はなも〔判読不能〕(短冊)
〔歌仙絵比較〕(1) 右(左手で冠に触れる)―右―右(2)

①立烏帽子。緑色の地に菊笹文の狩衣。青色の袖括りの緒。薄水色の袴。②綾。巻纓冠。霰紋の表袴。弓矢。③綾。巻纓冠。丁子色の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。弓矢。姿は「寛文版本」に同じ。〈備考〉「同志社本」の姿は異色。

姿は「寛文版本」に同じ。

〔出典〕『新古今集』巻第一春歌上、九三番。作者名「藤原雅経」。詞書「和歌所歌合に、羈旅花といふことを」。※建仁元年（一一〇一）三月二十九日、新宮撰歌合「羈中見花」の歌。

【五番】左 能因法師 山てらのはるのゆふくれきてみれはいりあひのかねに花そちりける



〔字母〕（山）天良乃／盤流能遊不久礼／支天三礼八／以里安比乃／可祢農／（花）曾／知利介留

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）左（右手に数珠）―左―左（2）①僧綱襟。青色の縁、水色に花文の五条袈裟。数珠。②黒衣の直綴。③僧綱襟。五条袈裟。〈備考〉「同志社本」の姿は「文情絵短冊」と同じ。

〔出典〕『新古今集』巻第二春歌下、一一六番。作者名「能因法

師」。詞書「山ざとにまかりて、よみ侍りける」。

【六番】右 後京極摂政前太政大臣 わするなよたのむのさは
をたつかりもいな葉のかせの秋のゆふくれ



〔字母〕和寸流／那与／堂乃武能／左盤越／堂川可李／毛／以
奈（葉）乃／可世乃／（叶）乃遊婦具礼

〔本文異同〕○後京極摂政前太政大臣（卷子・短冊）―後京極
摂政太政大臣（版本）

〔歌仙絵比較〕（1）右―右―右（2）①立烏帽子。薄水色の

地に菱形文の袍。紅の下襲。薄茶色の地に丸文の表袴。②立烏
帽子。丸文の袍。丸菱文の表袴。下襲の裾なし。③垂纓冠。金
唐草模様朱の袍。丸花文の下襲の裾。窠蔽の表袴。朱の大口
袴。右手に笏。飾太刀。（備考）「同志社本」の姿は「寛文版
本」に同じ。

〔出典〕『新古今集』卷第一春歌上、六一番。作者名「摂政太政
大臣」。詞書「帰雁を」。

【七番】左 皇太后宮大夫俊成 駒とめてなを水かはむ山吹の
花のつゆそふるての玉河



〔字母〕(駒) 止免天／奈越(水) 可盤舞／(山吹)／乃／(花)
乃川遊曾不／井天乃／(玉河)

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 左(左手に中啓) — 左(右立膝、顔は上向き) — 左(2) ①立烏帽子。薄水色の地に黄水流水文の狩衣。白色の袖括りの緒。浅葱鼠地に菱花丸文の表袴。青地に花文の下襲。中啓。②立烏帽子。丸花文の袍。笹文の表袴。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。(備考)「同志社本」
「寛文版本」は口髭と顎髭を蓄えた姿。対して「文情絵短冊」の顔つきは幼い。中啓を持つのは「同志社本」のみ。

〔出典〕『新古今集』巻第二春歌下、一五九番。作者名「皇太后宮大夫俊成」。詞書「(百首歌たてまつりし時)」。 ※文治六年(一一九〇)三月、五社百首の内、春日社に奉納された「款冬」題の歌。

〔八番〕右 寂蓮法師 くれてゆくはるのみなどはしらねとも
かすみにおつるうちの柴船



〔字母〕具礼天／由久／盤流乃三那止半／之良衿止裳／可須三
耳／於川留／字知乃／(柴船)

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 右(右手で中啓の頭を持つ・左袖口に数珠) — 身体はやや背面、顔は右 — 右(2) ①僧綱襟。薄緑の袍。赤茶色の地に葉唐草文の五条袈裟。数珠。笏。②僧綱襟。五条袈裟。手に持つのは中啓か。③僧綱襟。黒地に金色の模様
の五条袈裟。(備考)「寛文版本」の身体の向きは異色。

〔出典〕『新古今集』巻第二春歌下、一六九番。作者名「寂蓮法師」。詞書「五十首歌たてまつりし時」。 ※建仁元年(一一二〇)

(一) 二月、老若五十首歌合の歌。

【九番】左 六條前太政大臣 ほと、きすなきてゐるさの山の
端は月ゆへよりもうらめしき哉



〔字母〕保止(、) 幾須／奈支天／以留／佐乃／(山) 乃(端)
八／(月) 遊部与利／毛／宇良免之支(哉)

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 左下(右手に筆・左手に紙)―左(右手に笏)―真左(2) ①立烏帽子。青色地に青紅葉と糸菊文の狩衣。白色の袖括りの緒。紅の下襲。白の長袴。赤白の紙。手に

筆。硯箱に硯と筆。②垂纓冠。黒の袍。下襲の裾。霰紋の表袴。飾太刀。笏。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の下襲の裾。格子に窠の表袴。飾太刀。(備考)「同志社本」の硯と筆、紙は異色。袴の描き方は「同志社本」「文情絵短冊」の後鳥羽院に通じる。

〔出典〕『新古今集』卷第三夏歌、二二一番。作者名「前太政大臣」。詞書「ほととぎすの心をよみ侍りける」。

【二〇番】右 藤原基俊 たまかしはしけりにけりな五月雨に
葉もりの神のしめはふるまで



〔字母〕堂満可之八／新介利／耳／介利奈／（五月）／（雨）／尔
／（葉）／毛里／乃／（神）能／志免八布流／末天

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）背面（顔は右）―右―右（2）①垂纓冠。茶色地に花唐草文の袍。薄水色の表袴。②萎烏帽子。花文の袍。③萎烏帽子。丁子色の地に亀甲文の狩衣。赤色の袖括りの緒。〔備考〕「同志社本」の後ろ姿は異色。姿は「寛文版本」
「文情絵短冊」に近い。「同志社本」の白髪に対し、「文情絵短冊」は黒髪で顔も若い。

〔出典〕『新古今集』卷第三夏歌、二二三〇番。作者名「藤原基俊」。詞書「雨中木繁といふころを」。

【二一番】左 従三位頼政 にはのおもはまたかほかぬにゆふ立のそらさりけなくすめる月哉



〔字母〕尔盤乃於裳／八／満多可八可怒尔／遊不（立）乃／所
良左利介那／俱／須免流（月）／（哉）

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）左（右手に中啓）―身体は左、顔は右（振り返った姿）―左（2）①萎烏帽子。薄い丁子色地に丸花文の狩衣。青色の袖括りの緒。緑色の地に亀甲文の下襲。薄水色の表袴。飾太刀。中啓。②萎烏帽子。紋付きの狩衣。袖括りの露。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。霰紋の表袴。朱の大口袴。飾太刀。〔備考〕「寛文版本」の姿勢は異色。口髭、顎髭はいず

れにもある。

〔出典〕『新古今集』卷第三夏歌、二二七番。作者名「従三位頼政」。詞書「夏月をよめる」。

【二番】右 前大僧正慈鎮 雲まよふ夕に秋をこめなからか
せもほにいてぬ荻のうへ哉



〔字母〕(雲) 満与不(夕) 耳(炂) 遠(古免) 那可良(可世) / 毛(保) 尔(以天怒) (荻) 乃字部 (哉)

〔本文異同〕○前大僧正慈鎮(卷子・版本)―大僧正慈円(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 右(左手に数珠)―右―右上(右立膝)

(2) ①僧網襟。茶色地に花文の袍。青色地に尽くし文様の五条袷袢。横被。白地に丸花文の表袴。数珠。②僧網襟。五条袷袢。横被。③僧網襟。五条袷袢。丸花文の表袴。(備考)横被を描くのは「同志社本」と「寛文版本」。

〔出典〕『新古今集』卷第三夏歌、二七八番。作者名「前大僧正慈円」。詞書「夏歌とてよみ侍りける」。

【三番】左 法橋顕昭 水くきのおかのくす葉も色つきて今
朝うらかなし秋のはつかせ



〔字母〕(水) 久幾乃於可能／久須(葉) 毛／(色) 川支天／(今朝)／宇良可那之／(秋) 乃／盤川可世

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 左(右膝を立てる・左手に数珠・右手に扇)―左―左(両手は膝の上) (2) ①丁子色の直綴。緑色の縁に茶色地に金の模様の五条袷袷。数珠。扇。②黒の表衣。③丁子色の表衣の上に座すか。白の袴。②「寛文版本」では表衣を着用。(備考) 五条袷袷は「同志社本」のみ。

〔出典〕『新古今集』巻第四秋歌上、二九六番。作者名「顕昭法師」。詞書「(千五百番歌合に)」。

【二四番】右 鴨長明 秋かせのいたりいたらぬさとあらし
た、われからのつゆのゆふくれ



〔字母〕(焔) 可世乃／以堂利／伊多良怒／左止八／安良之／堂(ノ) 王礼可良／乃／川遊乃由不久礼

〔本文異同〕○さと(卷子)―袖(版本・短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 右(右手に扇)―右―右(左手に中啓)
(2) ①黒の直綴。茶色地に白の縫い取りの袷袷。扇。②萎烏帽子。狩衣。袖括りの緒。中啓。③立烏帽子。薄茶色の狩衣。茶色の袖括りの緒。(備考)「同志社本」は白髪交じり。

〔出典〕『新古今集』巻第四秋歌上、三六六番。作者名「鴨長

明」。詞書「(秋の歌とてよみ侍りける)」。第四句「袖はあらじ」

【二五番】左 大藏卿有家 かせわたる浅茅かすゑのつゆにたにやとりもはてぬ宵の稲妻



〔字母〕可世／王堂流／(浅茅)／可／寸衛／乃／川遊／耳／堂仁／也止利／毛／盤天奴／(宵)乃／(稲)／(妻)

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 左(顔は上向き)―左―左 (2) ①綾。卷纓冠。黒の袍。紅の下襲の裾。窠霰の表袴。矢を入れた箆。

弓。飾太刀。②立烏帽子。菱紋の袍。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。(備考)「同志社本」は武官装束。
〔出典〕『新古今集』卷第四秋歌上、三七七番。作者名「藤原有家朝臣」。詞書「撰政太政大臣家百首歌合に」。※「撰政太政大臣」は藤原良経。

【二六番】右 宜採門院丹後 わすれしなにはの秋のよはのそらことうらにすむ月はみるとも



〔字母〕王寸礼／之那／奈尔盤／乃／(秋)／乃／与盤能／所良
／已止字良仁寸武／(月) 八三流／止毛

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕(1) 正面(顔は左／右手の扇で口元を隠す) 右
―右 (2) ①白地に朝顔文の裳。引腰。紅の長袴。菊に蝶の
表衣。檜扇。②草花文様の裳。引腰。③裳。引腰。紅の袴。三
盛亀甲と流水に紅葉の表衣。(備考)扇を手にしているのは
「同志社本」のみ。

〔出典〕『新古今集』巻第四秋歌上、四〇〇番。作者名「宜秋門
院丹後」。詞書「(八月十五夜和歌所歌合に、海辺秋月といふこ
とを)」。 ※建仁元年(一一二〇) 八月十五夜撰歌合の歌。

【二七番】左 俊成女 あくかれてぬぬよのちりのつもるまで
月にはらはぬ床のさむしろ



〔字母〕安久／可礼天／祢奴与／乃／知利／乃／川毛流／満
天／(月)／耳／盤良八奴／(床) 乃左武之呂

〔本文異同〕○左(卷子・版本)―右(短冊) ○俊成女(卷
子)―俊成卿女(版本) 皇太后宮太夫俊成卿女(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 身体は左、顔は右(右袖に檜扇)―左(両
袖を口元に)―身体は左、顔は右 (2) ①裳。引腰。薄緑地
に花唐草文の表衣。紅の長袴。檜扇。②裳と引腰なし。うねっ
た長い髪。③裳と引腰なし。梅唐草の表衣。紅の袴。(備考)

「同志社本」の姿勢は「文情絵短冊」に酷似。

〔出典〕『新古今集』巻第四秋歌上、四二九番。作者名「(皇太后宮大夫俊成女)」。詞書「題しらず」。

【二八番】右 西行法師 きりくすよさむに秋のなるまゝによはるか聲のとをさかりゆく



〔字母〕幾季(く) 須(く) 与左武尔(く) 乃(く) 奈流(く) 末(く)

／尔(く) 与盤留(く) 可(く) 殿(く) 乃(く) 止越左可利遊俱

〔本文異同〕○右(卷子・版本) 一左(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 右(左手の数珠を胸のあたりに) 一右(右手に数珠か) 一右(両手を膝に) (2) ①黒の直綴。数珠。②

黒の直綴。五条袈裟。③黒の直綴。数珠。(備考)数珠を持つ

のは「同志社本」と「寛文版本」。五条袈裟は「寛文版本」のみ。〔出典〕『新古今集』巻第五秋歌下、四七二番。作者名「西行法師」。詞書「題しらず」。

〔下巻〕

【二九番】左 後久我前太政大臣 あけほのや河せの波のたかせふねくたすか人の袖の秋霧



〔字母〕安氣本乃也／(河)世乃(波)／乃／堂可世不祿／久多須可／(人)乃／(袖)乃(秋霧)

〔本文異同〕○左(卷子・版本)―右(短冊) ○後久我前太政大臣(卷子)―後久我太政大臣(版本) 後久我太政大臣通光(短冊) ○くたすか(卷子・短冊)―わたすか(版本)

〔歌仙絵比較〕(1)左(両手で笏を水平に持つ)―身体は正面、顔は右(右手に笏)―真左 (2)①垂纓冠。黒地に唐草文の袍。朱に菱文の下襲の裾。窠叢の表袴。朱の大口袴。平緒。飾太刀。笏。②立烏帽子。襷柄の袍。笏。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の下襲の裾。窠叢の表袴。朱の大口袴。飾太刀。(備考)「同志社本」の装束は「文情絵短冊」に酷似。〔出典〕『新古今集』巻第五秋歌下、四九三番。作者名「左衛門督通光」。詞書「河霧といふことを」。

〔二〇番〕右 従二位家隆 露時雨もる山かけの下紅葉ぬるともおらむ秋のかたみに



〔字母〕(露時雨)毛留／(山)可氣乃／(下紅葉)／奴留止毛／於良武／(秋)乃可多三尔

〔本文異同〕○右(卷子・版本)―左(短冊) 〔歌仙絵比較〕(1)右(左手で笏の頭を持つ)―右(左立膝に両手を組む)―右(右立膝、両手は左右の膝の上) (2)①立烏帽子。薄萌黄地に青紅葉文の狩衣。青色の袖括りの緒。茶色地に丸花文の下襲。薄水色の表袴。笏。②垂纓冠。黒の袍。丸



文の表袴。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。三つ輪文の表袴。
 〈備考〉立膝をしていないのは「同志社本」のみ。笏を持つのも「同志社本」のみ。
 〔出典〕『新古今集』巻第五秋歌下、五三七番。作者名「家隆朝臣」。詞書「千五百番歌合」。
 〔二一番〕左 大納言通具 霜こぼる袖にもかけは残りけり露よりなれしあり明の月

〔字母〕（霜）己保留／（袖）尔裳／加気八／（残）利介里／（露）与里奈礼之／阿里（明）乃（月）

〔本文異同〕○左（卷子・版本）―右（短冊）

〔歌仙絵比較〕（1）身体は正面、顔は右下（左手に笏）―左（左立膝の上に左手で笏を立てる）―正面（右立膝に右手で頬杖をつく）（2）①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。窠敷の表袴。

朱の大口袴。丸花文の下襲の裾。平緒。飾太刀。笏。②垂纓冠。黒の袍。丸花文の表袴。笏。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。〈備考〉笏を持つのは「同志社本」と「寛文版本」。

〔出典〕『新古今集』巻第六冬、五九四番。作者名「右衛門督通具」。詞書「春日歌合に、暁月といふ事を」。 ※元久元年（一二〇四）十一月十日、春日社歌合の歌。

【二三番】右 藤原秀能 かせふけはよそになるみのかたおも
ひおもはぬ波になくちとりかな



〔字母〕加世不気／波／与所尔奈留三／乃／可多於毛比／於毛
者奴（波）尔／奈久知止里／可奈

〔本文異同〕○右（卷子・版本）―左（短冊）

〔歌仙絵比較〕（1）右（顔はやや下）―身体は右、顔は左（右
手に畳扇）―右（2）①垂纓冠。茶色地に花唐草羊歯文の袍。
紅の下襲。薄水色の表袴。②萎烏帽子。花文の袍。畳扇。③
綾。卷纓冠。群青色の無文の袍。表袴は白地に七曜文か。（備
考）「文情絵短冊」のみ武官装束。

〔出典〕『新古今集』卷第六冬歌、六四九番。作者名「藤原秀
能」。詞書「最勝四天王院の障子に、なるみの浦かきたるとこ

ろ」。 ※承元元年（一二〇七）十一月、最勝四天王院障子和
歌の歌。

【二三番】左 式子内親王 かたしきの夜半の衣手さえく／て
初雪しろし岡のへの山



〔字母〕加堂之幾乃／（夜半）／乃／（衣手）／左盈／（く）／天
／（初雪） 志呂之／（岡） 乃部乃／（山）

〔本文異同〕○左（卷子・版本）―右（短冊） ○かたしきの（卷子）―さむしろの（版本・短冊）

〔歌仙絵比較〕（1）左（顔は眉あたりまで）―背面（後ろ頭のみ）―左（2）①六角花文の表衣。紅の袴。几帳。縹縹縁の畳。②几帳。脇息。茵。③菱文の表衣。紅の袴か。几帳。縹縹縁の畳。（備考）畳は「同志社本」と「文情絵短冊」。

〔出典〕『新古今集』巻第六冬歌、六六二番。作者名「式子内親王」。詞書「百首歌に」。初句「さむしろの」 ※正治二年（一二〇〇）院初度百首の歌。

〔二四番〕右 崇徳院 みかりするかたの、みのに降霰あなま、たき鳥もこそたて



〔字母〕見可里寸留／加多乃（々）／三乃尔／（降霰）／安奈／可万（々）堂起／（鳥）毛已所／堂天

〔本文異同〕○右（卷子・版本）―左（短冊） ○崇徳院（卷子・版本）―崇徳院御製（短冊）

〔歌仙絵比較〕（1）右―右―右（左袖を顎のあたりに）（2）①垂纓冠。橙色の地に菊文の袍。丸花文の下襲の裾。窠霰の表

袴。朱の大口袴。茵。②立烏帽子。茵。③垂纓冠。紺青の地に丸文の袍。紅の表袴。縹縹縁の畳。(備考)茵は「同志社本」と「寛文版本」。

〔出典〕『新古今集』巻第六冬歌、六八五番。作者名「崇徳院御歌」。詞書「百首歌めしける時」。※久安六年(一一五〇)、久安百首の歌。

【二五番】左 後法性寺入道前関白太政大臣 しふるにころのひまはなれともなをもる物は涙なりけり



〔字母〕志乃婦留尔ノ己(、)路乃比ノ末八ノ奈計連止毛ノ奈

越毛留(物)八ノ(涙) 奈利計里

〔本文異同〕○左(卷子・版本)―右(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1)左(左手で笏の頭を持つ)―真左(身体正面に笏)―身体は左、顔は右(2)①僧綱襟。白地に青色の縁の五条袈裟。白の長袴。横被。笏。②垂纓冠。黒の袍。丸花文の下襲の裾。霰紋の表袴。笏。③垂纓冠。白地に丸花文の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。右手に笏。畳。(備考)「同志社本」のみ法体。

〔出典〕『新古今集』巻第十一恋歌一、一〇三七番。作者名「入道前関白太政大臣」。詞書「百首歌よみ侍りける時、忍恋」。※治承二年(一一七八)、右大臣家百首の歌か。

【二六番】右 二条院讃岐 みるめこそ入ぬる礮のくさならめ
袖さへ波の下にくちぬる



〔字母〕美流免／己所／（入）奴留（礮）／乃／久佐奈良免／
（袖）左部（波）乃／（下）尔久知／奴留

〔本文異同〕○右（卷子・版本）―左（短冊）

〔歌仙絵比較〕（1）右―右―右（2）①花文の裳。引腰。緑色の地に牡丹文の表衣。紅の長袴。②裳。引腰。表衣。③裳。引腰。表衣は丸に三つ星文か。紅の袴。

〔出典〕『新古今集』卷第十二恋歌二、一〇八四番。作者名「二条院讃岐」。詞書「恋歌としてよめる」。

【二七番】左 後徳大寺左大臣 さめて後ゆめなりけりとおもふにも逢はわかれの惜くやはあらぬ



〔字母〕左免天（後）／由免奈利／計里止／於毛不尔毛／（逢）
盤王可礼／乃／（惜）久也八／阿良奴

〔本文異同〕○左（卷子・版本）―右（短冊） ○わかれ（卷子）―なこり（短冊・版本）

〔歌仙絵比較〕（1）左―身体は背面、顔は右（左手を下ろし笏の頭を持つ）―左（右立膝、顔は上向き／右手に笏）（2）①垂纓冠。薄水色地に丸花文の袍。紅の下襲。薄紫色の地に丸文



の表袴。②垂纓冠。黒の袍。下襲の裾。霰紋の表袴。笏。飾太刀。③垂纓冠。白地に唐草丸文の袍。紅の下襲。表袴は丸に三つ輪文か。笏。鬘。(備考)「寛文版本」の姿は異色。

〔出典〕『新古今集』巻第十二恋歌二、一一二五番。作者名「後徳大寺左大臣」。詞書「かたらひ侍りける女の、ゆめに見えて侍りければよみける」。第四句「あふはなごりの」

〔二八番〕右 源俊頼朝臣 あしの屋のしつはた帯のかた結びこゝろやすくもうちとくるかな

〔字母〕阿之乃(屋) 乃/志徒者多/(帯) 乃/可多(結) 比/己(、) 路/也須久母字知/登久留可奈

〔本文異同〕○右(卷子・版本)―左(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 身体は背面、顔は左―右(左手に笏)―右(2) ①萎烏帽子。鶯茶色地に流水文の狩衣。白色の袖括りの緒。丁子色の表袴。②垂纓冠。黒の袍。丸花文の表袴。笏。③綏。卷纓冠。紺地に朱の三つ葉文の袍。紅の下襲。下襲の裾。霰の表袴。朱の大口袴。飾太刀。(備考)「文情絵短冊」のみ武官装束。「同志社本」は白髪翁。

〔出典〕『新古今集』巻第十三恋歌三、一一六四番。作者名「俊頼朝臣」。詞書「初会恋の心を」。 ※長治二年(一一〇五)頃、堀河百首の歌。

【二九番】左 正三位知家 これもまたなかきわかれとなりや
せむ暮を待へきいのちならねは



〔字母〕古礼毛／末多／奈可幾王可連／止／奈里也世武／〔暮
越〔待〕部幾／以乃知奈良祢八

〔本文異同〕○左（卷子・版本）―右（短冊） ○わかれと（卷
子・短冊）―わかれに（版本）

〔歌仙絵比較〕（1）身体は正面、顔は右（右手で笏の頭を持
つ）―身体は左、顔は右（左手に笏）―身体は左、顔は右（左
手をかざす）（2）①垂纓冠。薄水色地に菱文の袍。紅の下
襲。薄紫地の丸花文の表袴。笏。②葵烏帽子。狩衣。袖括りの
緒。笏。③垂纓冠。黒の袍。丸花文の下襲の裾。紅の下襲。窠

霰の表袴。朱の大口袴。飾太刀。

〔出典〕『新古今集』卷第十三恋歌三、一一九二番。作者名「藤
原知家」。詞書「（題しらず）。第二句「ながきわかれに」

【三〇番】右 西園寺入道前太政大臣 こひわたるなみたやそ
らに曇るらむ光もかはるねやの月かけ



〔字母〕己飛王多留／奈美多也／所良尔（曇）留／良武／（光）
毛可者留／祢也乃／（月）可気

〔本文異同〕○右（卷子・版本）―左（短冊） ○こひわたる
（卷子）―恋わふる（短冊・版本）

〔歌仙絵比較〕(1) 右(右手の中啓を肩のあたりに)―右(右手に笏か)―右(左立膝か) (2) ①頭巾。赤茶色地に花文の直綴。丁子色の地に花文の五条袷裳。中啓。②僧綱襟。笏か。③垂纓冠。白地に丸花文の袍。紅の下襲。菊菱文の表袴。(備考) 在俗の姿は「文情絵短冊」のみ。

〔出典〕『新古今集』巻第十四恋歌四、一二七四番。作者名「権中納言公経」。詞書「(千五百番歌合に)」。初句「こひわたる」。

【三二番】左 八条院高倉 いか、ふく身にしむ色のかはるか
なたのむるくれの松風の声



〔字母〕以可(こ) 婦久(身) 仁之(武) 色(色) 乃(加者留可)
奈(堂乃武留) 久礼(乃) 松風(乃) 乃(聲)

〔本文異同〕○左(卷子・版本)―右(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 左―背面―左 (2) ①草花模様の裳。引腰。緑色の地に笹松文の表衣。紅の長袴。②草花文の裳。引腰。表衣。③丸花文の表衣。菱文の表衣。紅の表袴。(備考)

後ろ向きは「寛文版本」のみ。

〔出典〕『新古今集』卷第十三恋歌三、一二〇一番。作者名「八条院高倉」。詞書「題しらず」。

【三二番】右 小侍従 つらきをもうらみぬ我にならふなよう
き身をしらぬ人もこそあれ



〔字母〕徒良幾越毛／宇良三奴（我）尔／奈良不奈与／宇起
（身）遠／志良奴（人）毛／己所安連
〔本文異同〕○右（卷子・版本）―左（短冊）

〔歌仙絵比較〕（1）真右（左手に扇）―右（右袖を口元に）―

身体は右、顔は背面（2）①花文の表衣。紅の長袴。檜扇。

②裳。表袴。③裳。引腰。花唐草の表衣。菱文の表衣。紅の袴。 豊。（備考）「同志社本」のみ裳がなく扇を持つ。

〔出典〕『新古今集』卷第十三恋歌三、一二二七番。作者名「小侍従」。詞書「題しらず」。

【三三番】左 大納言経信 夕日さすあさちか原のたひ人はあ
はれいつくにやとをかるらむ



〔字母〕(夕日) 左須／阿左知可(原) 乃／堂比(人) 八／安者
連以徒久／尔／(屋) 止越／可留良／舞

〔本文異同〕○左(卷子・版本)―右(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 正面―身体は正面、顔は左(右手をかざす)―正面(身体の正面に立てた笏の上に両手を載せる)

(2) ①垂纓冠。青色地に菱花文の袍。紅の下襲。薄水色地に丸花文の表袴。②垂纓冠。黒の袍。丸花文の表袴。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。笏。(備考)「寛文版本」

〔文情絵短冊〕はそれぞれ異色な姿。

〔出典〕『新古今集』卷第十 羈旅歌、九五一番。作者名「大納言経信」。詞書「暮望行客といへることを」。第四句「あはれい
くよに」。

【三四番】右 前大納言忠良 折にあへはこれもさすかには
れなり小田のかはつのゆふ暮のこゑ



〔字母〕(折) 尔阿部波／己礼毛左須可尔／阿者連奈利／(小田)
乃可者徒乃／由不(暮) 乃／己恵

〔本文異同〕○右(卷子・版本)―左(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1) 右(下ろした右手に笏)―右(右手で笏を
立てて持つ)―右(2) ①垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花
文の下襲の裾。霰紋の表袴。朱の大口袴。平緒。飾太刀。笏。

②垂纓冠。黒の袍。丸花文の下襲の裾。霰紋の表袴。笏。③垂纓冠。黒の袍。紅の下襲。丸花文の表袴。(備考)「同志社本」「寛文版本」は霰紋の表袴。

〔出典〕『新古今集』卷第十六雑歌上、一四七七番。作者名「前大納言忠良」。詞書「百首歌たてまつりし時」。 ※建仁元年(一一二〇)二月、老若五十首歌合の歌。

【三五番】左 前大納言兼宗 世をすつるこゝろはなをそなかりけるうきをうしとはおもひしれとも



〔字母〕(世) 越寸川留／古(、) 路八奈遠所／奈可里計留／宇支遠宇之／止者／於毛比志礼止毛

〔本文異同〕○うきをうしとは(卷子・版本)―うしをうしとは(短冊)

〔歌仙絵比較〕(1)左(立てた右膝を両手で抱える)―左(右手に持った笏の上に顎を載せる)―真左(2)①立烏帽子。赤紫地に牡丹文の狩衣。薄い赤紫の袖括りの緒。薄黄緑地の下襲。薄水色の表袴。②垂纓冠。黒の袍。下襲の裾。霰紋の表袴。笏。③垂纓冠。黒の袍。丸花文の表袴。

〔出典〕『新古今集』卷第十八雑歌下、一七六九番。作者名「權中納言兼宗」。詞書「(五十首歌よみ侍りけるに、述懐の心を)」。第四句「うきをうしとは」。 ※建久九年(一一九八)頃、御室五十首の歌。

【三六番】右 藤原清輔朝臣 としへたるうちのはし守こと、はむいくよになりぬ水のみなかみ



〔字母〕止之遍多留／字知乃／者之（守）／古登（、）者武／以久与尔奈利奴／（水）乃三奈／可見

〔本文異同〕ナシ

〔歌仙絵比較〕（1）右―右（右手に持った笏を肩のあたりに上げる）―右（2）①萎烏帽子。薄黄緑の地に花文の狩衣。白色の袖括りの緒。青色地に笹唐草文の下襲。丁子色の表袴。②萎烏帽子。笏。③萎烏帽子。丁子色の地の丸文の袍。〔備考〕

「寛文版本」の姿は異色。

〔出典〕『新古今集』巻第七賀歌、七四三番。作者名「清輔朝臣」。詞書「嘉応元年、入道前関白太政大臣、宇治にて、河水久澄といふ事を人人によませ侍りける」。 ※嘉応元年（一一六九）十一月、宇治別業和歌の歌。

《考察》

一、本文について

本稿で取り上げている「同志社本」「寛文版本」「文情絵短冊」の間で、本文異同のない和歌は二十七首あり、すべて『新古今集』の和歌本文と一致する。一方、三者間で本文異同が存する歌は、次の九首である。これらの本文異同のうち、出典の『新古今集』と一致する本文に傍線を付した（以下、上記史料以外の和歌の用例は、『新編国歌大観』に拠る）。

【二番】後鳥羽院 ○あふさかの山（卷子・短冊）―あふさかの関（版本）

【四番】参議雅経 ○分すて、（卷子・版本）―こえすて、

（短冊）

【二四番】鴨長明 ○さと（卷子）―袖（版本・短冊）

【二九番】後久我前太政大臣 ○くたすか（卷子・短冊）―わたすか（版本）

【二三番】式子内親王 ○かたしきの(卷子)―さむしろの(版本・短冊)

【二七番】後徳大寺左大臣 ○わかれ(卷子)―なこり(短冊・版本)

【二九番】正三位知家 ○わかれと(卷子・短冊)―わかれに(版本)

【三〇番】西園寺入道前太政大臣○こひわたる(卷子)―恋わふる(短冊・版本)

【三五番】前大納言兼宗 ○うきをうしとは(卷子・版本)―うしをうしとは(短冊)

「同志社本」の和歌本文が『新古今集』と対立する歌は、一四番(鴨長明)、二三番(式子内親王)、二七番(後徳大寺左大臣)、二九番(正三位知家)の四首ある。このうち二九番の助詞一文字の異同は、「と(止)」と「に(尔)」の字母の字形類似によるのだろう。

一方、あとの三首は、既存の和歌や表現類型に引かれたものと想定される。すなわち、一四番歌を「秋かせのいたりいたらぬさとはあらし」としてしまったのは、その本歌の『古今集』(春下・九三・よみ人しらず・題しらず)の「春の色のいたりいたらぬさとはあらし」が念頭にあったためであろう。また、二三番歌の「かたしきの夜半の衣手」は、「かたしきのころも

できむくしぐれつつありあけの山にかかるむらくも」(続古今集・冬・五八四・後鳥羽院御歌・建保三年六月和歌所歌合に、暁時雨を)をはじめとして、新古今前後から用例が散見される表現である。そして、二七番歌の「逢はわかれの惜くやはあらぬ」には、「はじめよりあふはわかれと聞きながら暁しらで人をこひける」(続拾遺集・恋三・九二六・前中納言定家・洞院撰政家百首歌に、後朝恋)といった類例がある。

このように考察してみると、これら三首の本文異同は、本文の乱れではあるが、その背後に和歌表現の蓄積が読み取れるように思われる。

なお、左方・右方の記載について、「文情絵短冊」は、一七番(俊成卿女)から三四番(忠良)まで、左右が逆に記されているが、詳細については拙稿「同志社大学文化情報学部蔵「新三十六歌仙絵短冊」の紹介」(『社会科学』第五十三巻第三号)を参照されたい。

二、歌仙絵について

(1) 歌仙絵の身体や顔の向き

三十六歌仙絵は、左方・右方が交互に配置されることが多い。そうすると、歌仙絵の身体や顔は左右で向き合うのが構図として自然であろう。「同志社本」も左右の歌仙絵が向き合っている箇所が多い。上巻の右方、藤原基俊(二〇番)も、背面

ながら顔を左方の六條前太政大臣（九番。藤原頼実。）の方に向けている。

だが、上巻では、右方の宜秋門院丹後（二六番）は、身体は左方の大藏卿有家（二五番）の方に寄せながら、顔は逆に傾け、口元を扇で隠している。顔の向きからすると、丹後はむしろ、次の左方、俊成女（二七番）の方に向いている。俊成女の upper body を反らした姿勢（後述）も、直前の丹後の姿勢に呼应しているようである。上巻末尾の右方、右を向いている西行法師（二八番）は、卷子本を広げると、丹後と俊成卿女が向き合っているのを、傍らから眺めているような構図になる。

また、下巻では、左方の大納言通具（二二番）は、番いの右方、藤原秀能（二二番）とは逆の従二位家隆（二〇番）の方を向く。同様に、右方の俊頼朝臣（二八番）は、番いの左方、後徳大寺左大臣（二七番。藤原実定。）の方に身体をやや向けながら、顔は振り返るように、次の左方、正三位知家（二九番）の方を向く。さらに知家は、番いの右方、西園寺入道前太政大臣（三〇番。藤原公経。）ではなく、俊頼の方に顔を向ける。

このように「同志社本」は、必ずしも左方・右方の番いで向き合っているわけではないが、たとえばこの卷子本を、歌人二人ずつではなく連続して鑑賞する際には、上記の三人、あるいは四人の身体や顔の向きが、単調なリズムのアクセントともな

りそうである。実際、「同志社本」の歌仙絵は、姿勢そのものもバリエーションに富んでいる（後述）。

(2) 装束

i 男性装束の分類

「同志社本」全三十六図のうち、男性歌人は二十一図を占める。このうち、冠を着けるのは十二人。残り九人は烏帽子を被る。いま、新日本古典文学大系11『新古今和歌集』所収「人名索引」等を参看して極官と位階を付して整理する。

a 垂纓冠

(イ) 鼠青の袍・茵・紅の長袴 後鳥羽院（一番）

(ロ) 橙の袍・茵・下襲の裾・窠霰の表袴 崇徳院（二

四番）

(ハ) 黒の袍・下襲の裾・窠霰あるいは霰紋の表袴・飾太

刀

後久我前太政大臣（一九番・源通光）〈従一位太

政大臣〉・大納言通具（二二番）〈正二位大納

言〉・前大納言忠良（三四番）〈正二位大納言〉

〔注〕前中納言定家（二番）〈正二位権中納言〉

飾太刀ナシ

(ニ) 青色系の袍 後徳大寺左大臣（二七番。藤原実定

〈正二位左大臣〉・正三位知家（二九番）〈正三位左兵

衛佐)・大納言経信(三三番)〈正二位大納言〉

(ホ) 茶色の袍 藤原基俊(一〇番)〈従五位上左衛門

佐〉、藤原秀能(二二番)〈従五位上出羽守〉

b 卷纓冠・綉

(ヘ) 黒の袍・下襲の裾・窠霰の表袴・飾太刀 大藏卿

有家(一五番)〈従三位大藏卿〉

c 烏帽子

(ト) 立烏帽子 参議雅経(四番)〈従三位参議〉・後京極

撰政前太政大臣(六番、藤原良経)〈従一位撰政太政

大臣〉・皇太后宮大夫俊成(七番)〈正三位皇太后宮

大夫〉・六條前太政大臣(九番、藤原頼実)〈従一位

太政大臣〉・従二位家隆(二〇番)〈従二位宮内卿〉・

前大納言兼宗(三五番)〈正二位大納言〉

(チ) 葵烏帽子 従三位頼政(一一番)〈従三位右京権大

夫〉・源俊頼朝臣(二八番)〈従四位上木工守〉・藤原

清輔朝臣(三六番)〈正四位下太皇太后宮大進〉

a の垂纓冠を被った歌仙絵のうち、分類(イ)(ロ)は皇族

(院)で、これら二人のみ茵に座す。このうち(イ)の後鳥羽

院は、天皇が着用する麴塵の袍に緋(紅)の長袴という、天皇

在位中の姿である。この長袴の描写は、前稿でも指摘したよう

に、つとに『天子撰関御影』(十四世紀、藤原為信・豪信画、

宮内庁三の丸尚蔵館所蔵。)に見られるところである。一方、

(ロ) 崇徳院が、後鳥羽院と同様の装束ではなく、青年公卿が

用いるとされる窠霰の表袴で、顔つきも若いことに留意した

い。また、分類(ハ)の黒の袍の四人は、正二位以上の人物で

ある。有職に従えば、下襲の裾を引く場合、飾太刀を差すとさ

れるが、定家には飾太刀がない。また、四人中唯一、表袴が窠

霰でなく霰紋である。分類(ニ)の青色系の袍は正二位・正三

位の人物。これに分類(ホ)の茶色の袍の二人が続く。いずれ

も従五位上である。

b 卷纓冠・綉は、武官の装束であるが、「同志社本」では有

家ただ一人であるが、「寛文版本」「文情絵短冊」では、いずれ

も有家は武官姿ではない。「寛文版本」において、武官装束に

描かれるのは雅経である。

c 烏帽子を被る九人の中には、良経や頼実といった太政大臣

も含まれており、「同志社本」では、高位の人物が必ずしも束

帯姿で描かれるわけではないことがわかる。また、良経を除く

八人は、袖括りの緒が描かれる狩衣姿である。さらに、頼実が

烏帽子に白の長袴である点には留意されよう。「文情絵短冊」

では、立烏帽子は長明一人、葵烏帽子は基俊と清輔の二人であ

った(詳しくは前稿参照)。一方、「寛文版本」では、烏帽子姿

は十二人おり、良経も含まれる。

ii 女性歌仙絵の装束と構図

女性歌人は七人収められる。「同志社本」では、式子内親王についてはやや判断が難しいが、他はすべて紅の長袴である。また、裳と引腰は、宮内卿(三番)・宜秋門院丹後(一六番)・俊成女(一七番)・二条院讃岐(二六番)・八条院高倉(三一)の五名の絵には見え、式子内親王(二三番)と小侍従(三二番)には描かれない。

式子内親王は、「同志社本」全三十六図で唯一、畳を敷く。横たわり、几帳の陰に額が見えるという図である。これは、『百人一首』や『三十六歌仙』の歌仙絵にも見られる構図であり、式子内親王の他、持統天皇や斎宮女御にも用いられる。一揃いの歌仙図中の一図にのみ、高貴な女性歌人に割り当てられる構図と見られよう。一方、小侍従の絵は、「寛文版本」「文情絵短冊」では裳と引腰が描かれており、「同志社本」にないのは不審である。

また、扇を持つのは宜秋門院丹後・俊成女・小侍従である。宜秋門院丹後は扇で口元を隠し、俊成女は袖の中に扇を持って上体を反らすという姿、そして小侍従は、横顔の向こう側に扇を広げる。扇を持たない歌仙絵でも、宮内卿は袖を口元において、二条院讃岐は大きく膨らんだ袖を翻す姿である。

このように、前述の式子内親王を含めて、「同志社本」の女

性歌人の歌仙絵の姿はバリエーションに富んでいる。「同志社本」「寛文版本」「文情絵短冊」を視野に入れたとき、宮内卿・宜秋門院丹後の歌仙絵の姿は「同志社本」のみ異なり、また、俊成女や式子内親王、八条院高倉の姿は、「同志社本」「文情絵短冊」の共通性が高い。とくに俊成女の動きのある歌仙絵は特異でもあることから、その絵が酷似する「同志社本」と「文情絵短冊」が、部分的にでも同系統の粉本に接触していることが推察される。

iii 僧形の分類

「同志社本」において僧形で描かれる歌仙は八人を数える。このうち、高僧の法衣に付けるとされる僧綱襟なのは、能因法師(五番)、寂蓮法師(八番)、前大僧正慈鎮(一二番)、後法性寺入道前関白太政大臣(二五番。藤原兼実。)の四人である。

このうち寂蓮と慈鎮は、「寛文版本」「文情絵短冊」でも同様に僧綱襟である。一方、能因は、「文情絵短冊」では僧綱襟だが、「寛文版本」では黒の直綴を着ける。『百人一首』の歌仙絵でも、能因を僧綱襟で描くものはまみ見受けられる。

また、兼実は、「寛文版本」「文情絵短冊」では在俗時の冠に袍、表袴という装束であり、「同志社本」のみ出家後の姿ということになる。ちなみに、「同志社本」では、西園寺入道前太政大臣(三〇番。藤原公経。)も頭巾を被った老人の出家姿で、

「寛文版本」では僧綱襟、「文情絵短冊」では兼実と同様の在俗時の姿に描かれる。呼称に「入道」と付く人物には出家後の姿を描くことで、呼称と歌仙絵とのイメージが一致する。ちなみに、鴨長明（一四番）を烏帽子に水干という在俗時の姿で描く「寛文版本」「文情絵短冊」に対し、「同志社本」が白髪交じりの頭で黒の直綴姿であるのも軌を一にする傾向だろう。

西行法師（一八番）は、一般に知られているイメージどおり、「同志社本」「寛文版本」「文情絵短冊」揃って黒の直綴である。また、法橋顕昭（二三番）が剃髪後の直綴姿であるのも、三者同様である。

このように、「同志社本」の僧形の歌仙絵は、人生を僧として生きた歌人のみならず、人生の終わりに出家した人物を含めた数に上っている。

三、まとめと今後の課題

以上、「同志社本」の本文と歌仙絵について「寛文版本」「文情歌仙絵」と比較した。和歌本文には、乱れがあるものの、そこに既存の和歌の表現類型が見出された。また、歌仙絵の構図や描画の方法は、「寛文版本」よりはむしろ「文情絵短冊」に通じるものがある。部分的にせよ、共通素材や粉本の存在を想定し得るであろう。

長袴の描写は、古くは『天子撰関御影』に見られるところで

あるが、延宝六年（一六七八）刊、菱河師宣画『百人一首像讚抄』や、土佐光起（一六一七～一六九一）画の国文学研究資料館蔵『三十六歌仙帖』（書誌ID200018648¹、和古書請求記号タ2-281²、<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/200018648/5?ln=ja>）にも同様の描き方が見出される。これらと同時代成立の歌仙絵に、必ずしも同様の長袴の描写が見られるわけではないことから推せば、こういった点から、土佐光起、菱河師宣と狩野洞雲といった十七世紀の絵師の接点とその文化圏の広がりを追究していくことも、あるいは可能かもしれない。

今後は、『三十六歌仙』や『百人一首』といった歌仙絵の枠を超えた視野で、装束に着目した考察を進めていく必要があるだろう。

附記

本稿は、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究、二〇二二～二〇二四年度、科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二三年度）、および同志社大学宮廷文化研究センター（二〇二二～二〇二五年度）における研究成果の一部である。

本稿執筆にあたり、石野浩司氏、末松剛氏には貴重なご教示を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。

（第21期第6研究会による成果）